

いっしきあおかい
一色青海遺跡

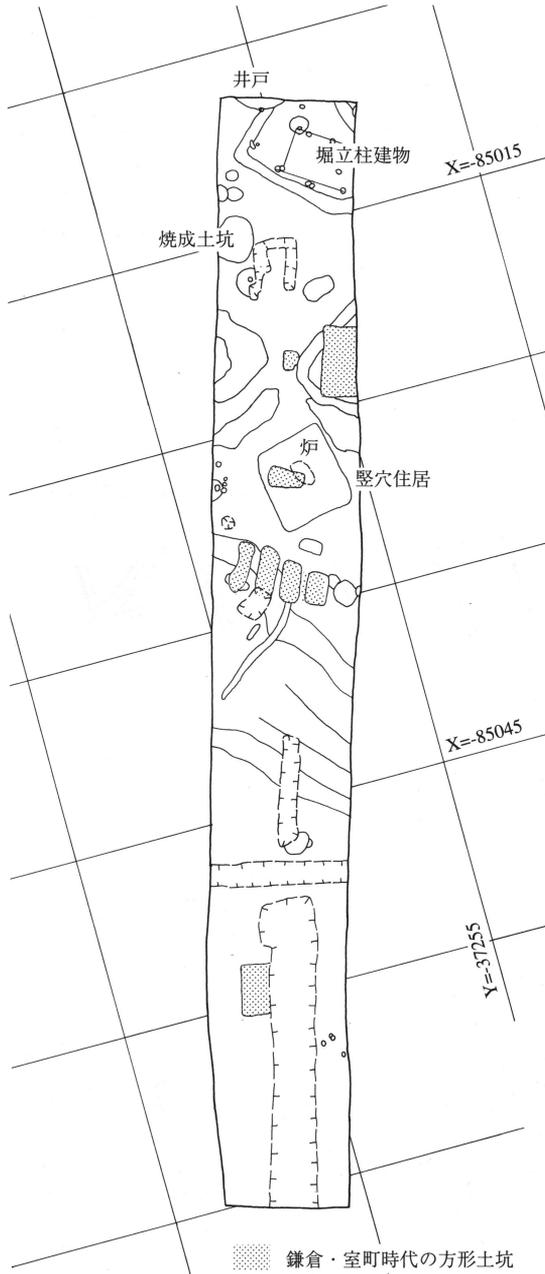
調査の経過 一色青海遺跡は、中島郡平和町須ヶ谷および稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡およびその周辺は、三宅川により形成された標高1 m前後の自然堤防とその後背地上の荒蕪地に位置している。

遺跡の周辺には、南東に尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡、儀長正楽寺遺跡などがあり、7世紀から8世紀にかけては、尾張の中心的存在であった地域でもある。

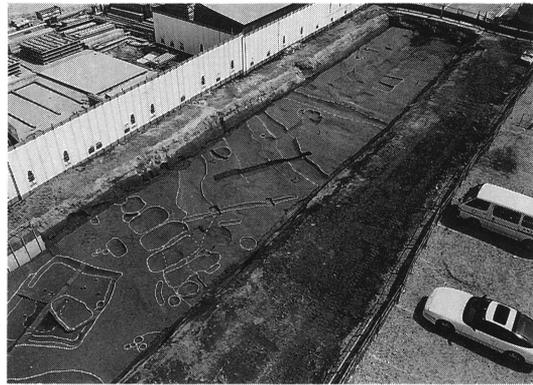
今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設および県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査であり、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託事業として平成5年度から継続調査している。最終年度となる本年度の調査面積は5,000㎡で、平成8年4月より5月にかけて日光川上流流域下水道浄化センター建設分として600㎡（A区）を、11月より平成9年3月にかけて県道馬飼井堀線建設分として4,400㎡（B区・C区・D区）を実施した。



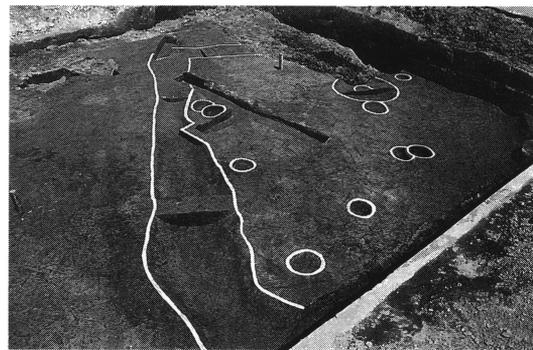
第1図 調査区位置図（1：5000）



第2図 A区遺構図(1:400)



A区全景



堀立柱建物検出状況



竪穴住居完掘状況



炉検出状況

調査の概要 遺構は、主に弥生時代中期後葉と鎌倉・室町時代のものを確認することができた。

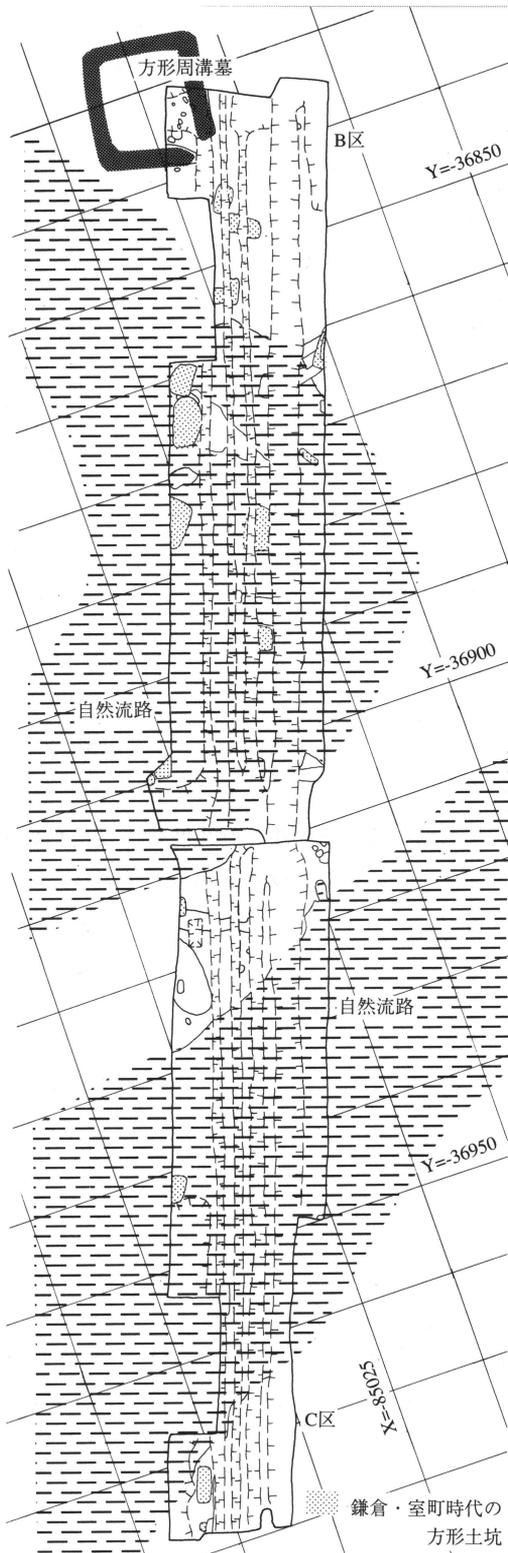
A 区 A区は、95C b区と95D区に挟まれた調査区である。後世の削平により包含層の残存状況は良好でなかった。まず弥生時代中期後葉の遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、井戸1基、焼成土坑や溝などが検出された。これらは主に調査区北側に集中している。掘立柱建物は2間×1間以上で、柱穴の配置、規模などから高床倉庫と考えられる。竪穴住居では中央に炉をみつけることができたが、支柱穴は明瞭な状態で検出できなかった。井戸では、下層から建物の廃材と考えられる木製品が出土している。焼成土坑は、灰ブロックを伴う炭化物層と粘土層が互層となっており、幾度かの焼成の結果と推測される。また、溝は95C b区中央部と95D区と同様に微高地の縁辺に沿うかたちで方向性をもって検出されたが、出土遺物は希薄である。次に鎌倉・室町時代の遺構は、方形土坑が9基検出された。

B区・C区 B区・C区 B区およびC区は、95F区の東側に位置する。調査区の約半分が後世の攪乱を受けている。まず弥生時代中期後葉の遺構は、B区北東に方形周溝墓の一部と推定される溝、小土坑数基、自然流路が検出された。自然流路は、B区を北東から南西に、C区を北西から南東にむかうかたちで検出された。幅は、40mにおよび、深さは深いところで検出面より1.8m～9mにあよぶ。上層では止水性の堆積が見られ、7世紀代の須恵器などが出土した。下層になるとほとんどが激しい水流のあとをうかがわせるような砂とシルトの堆積で、植物の遺体が層となって大量に堆積している。その中に弥生時代中期後葉の土器や鳥形、木製農具、塊状の木製品などが出土した。また、C区の西の立ち上がりの部分では、炭化物の落ち込みが確認され、その炭化層からも弥生時代中期後葉の土器が出土した。また、鎌倉・室町時代の遺構として方形土坑がB区で14基検出された一方、C区では6基しか検出できなかった。

まとめ 今回の調査成果をまとめると以下のようになる。

1. 北西に隣接する一色長畑遺跡から南東の95B区の方に細長くのびる弥生時代中期後葉の居住域はA区の北側まで広がっていたと想定される。
2. 昨年度までの成果で明らかにされた北西から南東に蛇行しながら流れる自然流路は、B区・C区を横切るように流れ、弥生時代中期では激しい水流から度々流路を変えており、時期が下るとともに湿地化し、遺物から見て7世紀以降最終的に埋没すると考えられる。されにC区自然流路の炭化層の落ち込みから、この自然流路が一色青海遺跡の東端にあたと推測される。また出土する須恵器から、東方に位置する儀長正楽寺遺跡との関連も考えられる。B区東端に方形周溝墓の一部がかかると考えるならば、自然流路のさらに東に別の弥生時代の集落が存在したことも考えられよう。
3. 鎌倉・室町時代の方形土坑は、昨年度までの調査成果同様、主軸方向の類似性を認めることができた。A区では、微高地の縁辺に集中する傾向があった。B区で集中する一方、C区と95F区では希薄である。

(加藤博紀・早野浩二)



第3図 B区・C区遺構図(1:800)



B区 自然流路全景



B区 自然流路出土木製品



C区 自然流路全景



C区 自然流路出土木製品及び壺